240601（土）東洋音楽学会東日本支部例会博士論文発表要旨

「状況化された」音楽史記述の可能性：グローバル音楽史と間文化性の文脈における周文中とホセ・マセダによる韓国音楽の表象

李　惠平（日本学術振興会外国人特別研究員＠東京藝術大学）

本研究は、過去 20 年ほどに出版された音楽学研究にて多角的に援用されてきた「グローバル音楽史 global history of music」および「音楽的間文化性 musical interculturality」の二つの学術的立脚点に視座を据えつつ、音楽史記述、とりわけアジアの現代音楽研究に従事する際に、「歴史」と「ポジショナリティ」の重要性を唱えるものである。具体的な事例研究としては、いずれも戦後アジア第一世代の作曲家に属す、中国系アメリカ人の周文中 Chou Wen-chung（1923–2019）とフィリピンのホセ・マセダ José Maceda（1917–2004）の作品における韓国音楽の表象を取り扱う。上掲の学術的立脚点を踏まえて、朝鮮にルーツを持たない両氏による韓国伝統音楽の解釈を詳細に検証することで、現代音楽史における彼らの立ち位置を西洋・非西洋という二項対立に依拠しない立体的視点で把握することができ、そしてそれは、アジアの音楽学者が複雑な文化的背景を含めた音楽史記述に取り組む際の、有益な示唆となるであろう。

発表時間の制約により、今回の発表では本研究の概要を紹介する上で、本研究の方法論的基盤を指す二つのキーワード（「歴史」と「ポジショナリティ」）および三つの概念（「方法としてのアジア Asia as method」、「状況化された知識 situated knowledges」、「厚い記述 thick description」）を中心に取り上げる。これらの概念によって形作られた本研究の方法論は、（1）知識生産の過程における参照枠の転換、（2）先行研究との対話におけるポジショナリティの相対化、および（3）解釈・意味付けの過程における多角的な記述手法の採用の三つの側面を重視し、それらに基づきながら各論の考察を進める。

したがって、本研究で提唱される「状況化された音楽史記述」とは、近年の学術的思潮の挑戦に晒されている音楽学者・音楽史家の我々が、自分自身のポジショナリティや知的欲求に真正面から向き合う音楽史記述のあり方であり、さらに世界中の音楽学コミュニティにおける自らの立ち位置を見失うことなく、多様な視点や音楽の複雑な性質に対応可能な枠組みを意味するものである。（823 字）